

本抄について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 本抄が執筆された意義を、執筆当時の背景をふまえて答えなさい。

〔例〕本抄執筆の前々年、竜の口の法難で発迹願本され、上行菩薩の御確信にたたれた日蓮大聖人は、厳しい迫害に耐えて信仰を続けている門下一同に「開目抄」などの重抄を与えられ励まされた。本抄は、末法の衆生が成仏のために受持すべき南無妙法蓮華経の本尊について説き明かされていることから、「法本尊開願の書」とされている。(本尊抄 9 ペ)

問二 本抄の執筆の前年に執筆された「開目抄」の意義を答えなさい。

日蓮大聖人が法華経に予言されたとおりに実践された末法の「法華経の行者」であり、末法の衆生を救う主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かされていることから、「人本尊開願の書」とされている。(本尊抄 10 ペ)

問三 本抄は、四つの大段から構成されています。それぞれの大段の大意を答えなさい。

大段第一 〔例〕初めに、『摩訶止観』第五卷上の文が掲げられ、一念三千の典拠を示される。そして、『摩訶止観』に説かれる一念三千こそが天台大師智顗の究極・最高の教えであることを示される。続いて、一念三千が有情と非情にわたることを明かされ、木像・絵像を本尊とすることも、一念三千の法門で草木に色心の因果を認め、草木成仏が説かれて初めて成り立つことを示されている。(本尊抄 11 ペ)

大段第二 〔例〕「観心の本尊」のうち「観心」とは、「己心に十界が具わることを衆生が観することである」と示し、末法の凡夫の生命に十界が具わることを教えられ、そして本門の本尊を信じて南無妙法蓮華経を唱えるという本尊の受持によって成就する「受持即観心」の法門が明かされている。(同 6 ペ)

大段第二 〔例〕法華経本門寿量品では、「己心に具わる十界などの三千諸法がすべて示されている」とも、この本門の肝心である南無妙法蓮華経が、末法の衆生が成仏のために信受すべき「本門の本尊」であることが明かされている。その本尊のすがたは、南無妙法蓮華経を中心とするもので、寿量品で説かれている説法の場の様相で示され、五重三段を説き、南無妙法蓮華経こそが、末法の凡夫にとって下種益を具え、成仏を可能にする本尊であることを示し、続いて、上行菩薩をはじめとする地涌の菩薩が末法の初めに出現することを明らされ、この地涌の菩薩の振る舞いをされたのが、まさに日蓮大聖人であり、本門の本尊を願わす時であると述べられている。(同 12 ペ)

大段第三 〔例〕成仏の根本法である「一念三千を知らない末法の衆生に對して、久遠の釈尊が大慈悲を起して、この一念三千の珠を妙法五字に包み、地涌の菩薩を遣わして末法の未熟な凡夫の頸に懸けさせるのである」という結論を述べられている。(同 13 ペ)

問四 本抄の題号の読み下し方を答えなさい。

如來滅後 五の五百歳に始む 観心の本尊抄 (本尊抄 15 ペ)

問五 題号に具足されている四義に配し、その理由を具体的に答えなさい。

時 如来滅後五五百歳 理由 上行菩薩の出現する時を明かしている。

応 始む 理由 上行菩薩が始めて弘める義を明かしている。

機 観心 理由 文底下種仏法に縁のある末法の衆生の観心を明かしている。

法 本尊 理由 末法の衆生が拝する本門の本尊を明かしている。(本尊抄 15 ペ)

問六 題号の元意を答えなさい。

末法の始めに、上行菩薩、すなわち末法の御本仏・日蓮大聖人が初めて弘通され、一切衆生が信ずる対象となる本門の本尊を明かされた御抄である。(本尊抄 16 ペ)

問七 本抄の題号を「観心の本尊」と、「の」の字を入れて読む理由を答えなさい。

大聖人が御図顯される本尊は、末法の衆生の修行における明鏡として顯された本尊であるので、爾前経・法華経迹門、そして法華経本門の文上に説かれる経文上の仏菩薩を本尊とする「教相の本尊」と區別する意味がある。(本尊抄 6 ペ)

法華蓮の 教学試験発心教材②／観心本尊抄（第1～4章） 解答例
〈青年部教学試験1級 対応版〉

「摩可止観第五に……縁了を具足す等云々」（238頁1行目～239頁18行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「開合の異なり」（238頁1行目）について、具体的に説明しなさい。

十界・三世間・十如是の三千如是の開釈と百界・三十世間の三千世間の結成では、展開の仕方が異なるが、三千の数量や内実には変わりがないこと。（本尊抄 23 頁）

問二 「三種の世間」（238頁4行目）を説明しなさい。

一念三千における世間は、差別・違いの意。一個の生命を構成する心身の五要素の違いを示す五陰世間、一個の生命の違いを示す衆生世間、一個の生命を取り巻く環境の差を示す国土世間の3つ。この3つの世間を合わせて三世間という。（本尊抄 24 頁）

問三 「止観の正しく観法を明かすに至つて並びに三千を以て指南と為す」（238頁18行目）に関して、「開目抄」にどのようにお示しになられているかを答えなさい。

一念三千の法門は但法華経の本門・寿命品の文の底にいつめたり、竜樹・天親・知つていかもいまだ・ひろいいたさず但我が天台智者のみこれをいだけり（御書 189 頁）

問四 「説己心中所行法門」（239頁1行目）の読み下し方を答えなさい。

己心の中に行する所の法門を説く（本尊抄 32 頁）

問五 前問の文の「法門」を、具体的に説明しなさい。

天台が『摩可止観』第五卷正修正止観の章において、初めて明かした一念三千の法門。（本尊抄 32 頁）

問六 「草木に心有つて有情の如く成仏を為す可きや如何」（239頁9行目）の問いに対しての答えを、具体的に説明しなさい。

草木国土という非情の存在にも十如是が具わつていて、その十如是が色心に配当されることを示し、非情にも色心がることを明かされて、さらに草木にも三因仏性があることを示し、非情も縁にあえば仏界を現し、成仏することが明かされる。（本尊抄 46 頁）

問七 「此の事難信難解なり」（239頁9行目）について、法師品第十に説かれている『難信難解』を答えなさい。

我が説く所の經典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし。而も其の中に於いて、此の法華経は最も為難信難解なり（我所説經典無量千万億、已説、今説、当説。而於其中、此法華経最為難信難解）（法華経 362 頁、本尊抄 128 頁）

問八 「教門の難信難解」（239頁10行目）についての理由を2つ答えなさい。

爾前経では、二乗は永久に成仏できないと説きながら、法華経迹門では「二乗作仏」を説いたこと。（本尊抄 45 頁）

爾前経と法華経迹門では「始成正覺」を説きながら、法華経本門では「久遠実成」を説いたこと。（同 46 頁）

問九 「観門の難信難解」（239頁10行目）についての理由を、具体的に答えなさい。

一念三千という成仏の法の実践に関して、なかなかすぐ非情にも色心の二法・十如是を具わること説く点である。（本尊抄 46 頁）

問十 「仏性」（239頁18行目）について、具体的に説明しなさい。また、この「仏性」について「妙法尼御前御返事」にどのようにお示しになられているかを答えなさい。

一切衆生が本然的に具えている仏性の正因仏性、仏性を覚知し開き現す智慧の了因仏性、智慧を現すのを助けるすべての修行の縁因仏性の三つの仏性（三因仏性）。（本尊抄 44 頁）

我等衆生愚業・煩惱・生死果縛の身が、正・了・縁の三仏性の因によりて即法・報・応の三身と顯われん事疑ひなかるべし、妙法経力即身成仏と伝教大師も釈せられて候（御書 1403 頁）

「問うて曰く出処……之を信す可きなり」(240頁1行目～242頁13行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」(240頁1行目)について、「三世諸仏総勘文教相廃立」(総勘文抄)ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

己心と仏身と一なりと観ずれば速かに仏に成るなり、故に弘決に「**一切の諸仏の心は仏心と異ならずと観し給うに由るが故に仏に成ることを得るなりと云ふ、此れを観心と云う**」(御書1000頁)

問二 天台家の観心と末法の観心の勝劣について、「治病大小権実違目」(治病抄)ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

一念三千の観法に「**つあり一には理、二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり観念すでに勝る故に大難又色・声・香・味・触・法の五塵は、一念三千・此れは本門の一念三千なり天地はるかに殊なりことなり**」(御書998頁)

問三 「自面の六根を見ざれば」(240頁2行目)の『眼根』について、「御義口伝」ではいくつか仰せになられています。そのうちの1つを答えなさい。

〔例〕眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信する者は成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る処に眼の八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり此の大乗經典は諸仏の眼目と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は眼の功德を得るなり云云 (御書762頁)

問四 「明鏡を見ざれば」(240頁2行目)について、「御義口伝」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

惣じて鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡に付て重重の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮びるを本とせり妙法蓮華經の五字は万像を浮べて一法も残る物之無し (御書724頁)

問五 「衆生をして仏知見を…或説己身或説他身」(240頁5～16行目)において、引用されている12の經文は『総別の二義』に分けられます。『別の義』が始まる經文の最初の五字を答えなさい。(ただし、かぎカッコはのぞく)

提婆達多乃

問六 「隨自意」(241頁2行目)について、「諸經と法華經と難易の事」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

仏九界の衆生の意樂に随つて説く所の經經を隨他意という書えは賢父が愚子に隨うが如し、仏・仏界に随つて説く所の經を隨自意という、書へは聖父が愚子を隨えたるが如きなり (御書991頁)

問七 「自面も亦復是くの如し如何が信心を立てんや」(241頁6行目)について、「上野殿後家尼御返事」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

夫れ淨土と云うも地獄と云うも外には候はず、ただ我等がむねの間にあり、これをわするを仏といひ、これをまよひを凡夫と云う (御書1504頁)

問八 「唯一大事因縁の經文」(242頁2行目)について、この經文を答えなさい。

欲令衆生開仏知見〈衆生をして仏知見を開かしめんと欲す〉(法華經121頁、本尊抄60・86頁)

問九 前問の「一大事因縁」について、「御義口伝」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは經なり (御書716頁)

問十 「不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る」(242頁12行目)が説かれている「常不輕菩薩品第二十一」の經文を答えなさい。

我れは深く汝等を敬い、敢て輕慢せず。所以は何ん、汝等は皆な菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし。〈我深敬汝等、不敢輕慢。所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作仏〉『二十四文字の法華經』(法華經597頁、本尊抄88頁)

「問うて曰く教主釈尊は……所あらんや」等云云（242頁14行目～244頁17行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「此れより堅固に之を秘す」（242頁14行目）について、具体的に答えなさい。

末法における一切衆生の成仏の要諦である受持即観心の法門を明かす重要な問答が始まるため。（本尊抄102頁）

問二 「三惑」（242頁14行目）について説明しなさい。

見思惑は、偏った誤った見識・思想に関わる煩惱である見惑と感情に関わる煩惱である思惑。塵沙惑は、大乘の菩薩が他を救済するとき障りとなる無数の迷い。無明惑は、仏法の根本の真理に暗く受け入れない根源的な無知。（本尊抄99頁）

問三 「行の時は…得脱せしむ」（242頁15行目～16行目）について、「千日尼御返事」ではどのように仰せになられているか答えなさい。

故阿仏房の聖靈は今いつくにかをはずさんと人は疑うても法華経の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば靈鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に東むきにをはずと日蓮は見まいらせて候（御書1319頁）

問四 「是くの如き仏陀何を…住せしめんや」（242頁16行目）について、本抄の後段ではどのように仰せになられているか答えなさい。

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讀み与え給う

（御書246頁）

問五 「是くの如き因位の…功徳か」（243頁1行目）と「其の外十方……己身の三千か」（243頁8行目～9行目）を、具体的に答えなさい。

強調されている偉大な仏の生命をはじめとして、十界の生命が、卑小な我ら凡夫の生命に具わるとは、到底信じられないものではない。（本尊抄104頁）

問六 「四天」（243頁9行目）について、説明しなさい。

須弥山の半腹第四層級に住し、仏法を護持する四天王の略。東方が持国天王、南方が增長天王、西方が広目天王、北方が多聞天王（毘沙門天王）。（本尊抄102頁）

問七 「染無きこと虚空の如し」（243頁11行目～12行目）について、「当体義抄」ではどのように仰せになられているか答えなさい。

法性の妙理に染浄の二法有り染法は熏じて迷と成り浄法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり

（御書510頁）

問八 「断諸法中惡」（243頁18行目～244頁13行目）に対して、どのように反論しておられているか答えなさい。

法華経方便品に、十界互具を否定する爾前の経文の考えを載せたものであり、この方便品には欲令衆生開仏知見と、十界互具がしっかりと説かれていなければならない。（本尊抄114・122頁）

問九 「諸経と法華との相違は…之を顕わす」（244頁7行目～8行目）において、それぞれの四義について爾前経と法華経との根本的な相違を説明しなさい。

未顕と已顕＝教主釈尊自身が爾前経を「未顕真実」と断じ、法華経こそが真実の教えを顕わした経としている。

証明と舌相＝法華経の会座では、多宝・十方の諸仏の証明があるのに対して、爾前の一部の経に、わずかな仏による舌相が見られるだけである。

二乗の成不＝爾前経では二乗は救えないが、二乗を含め一切の衆生の成仏を説いたのが法華経である。

始成と久成＝教主の境地の深みに格段の相違があるという点。

（本尊抄122頁）

「但し会し難き所は……本尊は有名無実なり」（244頁18行目～246頁9行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「上の教主釈尊等の大難なり」（244頁18行目）について、この「大難」を具体的に説明しなさい。

仏が明らかに説かれていゝのであるけれども、偉大な教主釈尊のような仏の境涯が凡夫の心に具わるとは思えなかつた疑問。（本尊抄130頁）

問二 「已今当説」（244頁18行目）は、法華経法師品第十の文（法華経362頁）であるが、これを具体的に説明しなさい。

已説四十余年の爾前經

今説靈鷲山で説かれたとされる無量義經

当説釈尊が入滅の前に説いたとされる涅槃經

（本尊抄130頁）

問三 「三国に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法を覚知せり」（245頁3行目～4行目）について、「三国の三人」を具体的に答えなさい。

インドの釈尊・中国の天台・日本の伝教（本尊抄130頁）

問四 「初の大難」（245頁9行目）について、この「大難」を具体的に説明しなさい。

偉大な教主釈尊のような尊極の仏界が、凡夫の劣心に具わっているのか、という難問。（本尊抄142頁）

問五 「譬えば国王と夫人と新たに王子を生ぜん」（245頁9行目）の「国王」「夫人」「王子」は、それぞれ何をたとえたものか具体的に答えなさい。

国王諸仏

夫人仏の覺りの眞実の教えである法華經

王子法華經を初めて聞いて信じ、発心したばかりの菩薩

（本尊抄143頁）

問六 「譬えば国王と……以ての故なり」（245頁9行目～16行目）の経文は、どんなことを説いているか答えなさい。

どんな未熟な機根の衆生であっても、仏の覺りの眞実であり仏種である妙法を信じ持つなら、菩薩であり仏子であるから、仏力と法力によって守られ、また諸天などの加護も受けて、やがては必ず成仏できること。（本尊抄144頁）

問七 「此の大乗經典は……断ぜざれ」（245頁16行目～17行目）の経文は、どんなことを説いているか答えなさい。

妙法が仏の智慧そのものであり、一切諸仏を生み出す種、仏種であること。（本尊抄144頁）

問八 「此の方等經は……福田なり」（245頁17行目～246頁1行目）の経文は、どんなことを説いているか答えなさい。

この仏種である妙法から三種の仏身という仏果が生み出されること。（本尊抄144頁）

問九 「三種の身」（245頁18行目）について、説明しなさい。

仏としての本質的な三種の特性をいい、仏が覺った眞実・眞理の法身、最高の覺りの智慧をはじめ、仏と成って報いとして得た種々の特性を報身、人々を苦悩から救つたために、それぞれに応じて現実に表した姿を応身という。（本尊抄140頁）

問十 「夫れいれば……本有の三因之れ無し」（246頁2行目～6行目）は、何をお示しになられているか説明しなさい。

釈尊の眞実の成仏の因果である久遠の本因本果が明かされておらず、また衆生の化導にしても、種・熟・脱という化導の全体像が説かれていない。したがって、成仏の種子である妙法が明らかにされていない。（本尊抄145頁）

「問うて曰く上の……一身一念法界に遍し」等云云（246頁10行目～247頁8行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在らず」（246頁11行目）の経文は、どんなことを説いているかを答えなさい。

歡喜の心で受持・読誦などの修行、自行化他の実践を行うことで、本来、菩薩の修行の要諦とされている六波羅蜜の修行をせすに、六波羅蜜の功德が具わり、現れてくるというように。（本尊抄157頁）

問二 「具足の道を聞かんと欲す」（246頁12行目）の経文は、どんなことを説いているかを答えなさい。

妙法蓮華經に仏の因位の万行が具足しているのであり、この妙法を受持すれば、仏が成仏するために行じたあらゆる修行（万行）を行じなくとも、それを行じたことになる。（本尊抄157頁）

問三 「釈尊の因行果徳の……功德を譲り与え給う」（246頁15行目）は何についての御文かを具体的に答えなさい。
また、この御文は四種の力用を表しています。この御文を四種の力用に配しなさい。

釈尊の因行・果徳は、妙法蓮華經の五字に具わっており、我ら末法の凡夫は、この妙法を受持することで、仏の因果の功德を譲り受けることができるというのを明かされた「受持即観心」の御文である。（本尊抄158頁）

信力〓我等受持
行力〓我等受持
法力〓此の五字
仏力〓自然に譲り与え給う

（本尊抄159頁）

問四 「無上宝聚・不求自得」（246頁16行目）の経文は、どんなことを説いているかを答えなさい。

末法の衆生は妙法五字を受持することによって、仏の因行果徳の功德をすべてを集めた「最高の宝の集まり」を、意識して求めることなく得られることを表している。（本尊抄161頁）

問五 「我が如く等くして……皆仏道に入らしむ」（246頁17行目）の経文の元意として、日寛上人はどのように述べているかを答えなさい。
また、この経文は何を示しているかを答えなさい。

自受用身の当体、全くこれ我等衆生なり。（本尊抄162頁）
（御本尊を受持し唱題に励む我々凡夫の身が、そのまま自受用身と現れるのである）

「自受用身」は師、「我等衆生」は弟子であり、妙法受持によってこの師弟が一体になることから、「師弟不二」を示す。
（同163頁）

問六 「釈迦多宝・十方の……受得す」（247頁2行目）の経文について、日寛上人はどのように解釈しているかを答えなさい。
また、この経文は何を示しているかを答えなさい。

妙法を受持する我らは、仏種を持つ仏子であるから、三仏の跡を継いで、三仏の功德を受得することができぬ。この三仏が法報心の三身に当たることで、日寛上人は「我等、無作三身の跡を紹繼して無作三身の功德を受得て、即無作三身に顕る」と解釈している。（本尊抄163頁）

親の位や言を余すことなく子が継ぐという関係を意味することから、「親子一体」を示す。（同164頁）

問七 「我等が己心の釈尊は……無始の古仏なり」（247頁4行目）は、どのようなことを仰せになられているかを答えなさい。

受持即観心によって我ら衆生の生命の中に現れる己心の釈尊は、五百塵点劫の当初に顕された三身であり、無始無終の永遠の仏である。これによって、仏法を信受したばかりの凡夫に直ちに現れるのである。（本尊抄153・164頁）

問八 「我等が己心の菩薩等なり……我等が己心の菩薩なり」（247頁5行目）は、何を示しているかを答えなさい。

己心の菩薩である地涌の菩薩は己心の釈尊の眷属であるから、主君である釈尊も、臣下である地涌の菩薩も、我らの一心に具わることから、「吾臣吾体」を示す。（本尊抄165頁）

問九 「成道の時此の本理に称うて一身一念法界に遍し」（247頁8行目）を、末法の凡夫の実践に即して答えなさい。

成仏する時には、因果俱時であり境地冥合の法である妙法に合致して、自身の身（一身）も心（一念）も十法界全体に広くゆきわたり、久遠元初の境地冥合の自受用身の仏となるというようにある。（本尊抄167頁）

「夫れ始め……之を聞かん」（247頁9行目～248頁6行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「成劫」（247頁9行目）は、「四劫」の一つです。この「四劫」を説明しなさい。

一つの世界が成立し（成劫）、存続し（住劫）、崩壊し（壊劫）、再び成立（空劫）する経過を4つの時期に分けたもの。この四つの劫は『俱舍論』等に説かれている。（本尊抄172頁）

問二 「方便・実報・寂光」（247頁10行目）について、「総勘文抄」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

寂光をば鏡に譬え同居と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に譬え四土も一土なり三身も一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを寂光の仏と云う（御書573頁）

問三 「今本時の……同体なり」（247頁12行目～13行目）は、何をお示しになられたものかを答えなさい。

寿命品において、釈尊の久遠実成という本地が説かれた時、釈尊の因果の常住が明かされ、そして常住の仏の常住の淨土で、久遠実成の説法の場合において、教えを受けている衆生も、同様に永遠常住の存在である。（本尊抄177頁）

問四 前問の御文に関連して、法華経寿命品第十六ではどのように説いているかを答えなさい。

一心欲見仏 不自惜身命 我及衆僧 俱出靈鷲山 我時語衆生 常在此不滅 一心に仏を見だてまつらんと欲して 自ら身命を惜しまざれば 時に我れ及び衆僧は 俱に靈鷲山に出ず 我れは時に衆生に語る 常に此に在って滅せず（法華経490頁 本尊抄177頁）

問五 「此の本門の肝心」（247頁16行目）について、具体的に答えなさい。

本門寿命品の教説で指し示されている釈尊の因行果徳を納めた仏種である一念三千・因果俱時の妙法であり、具体的には「南無妙法蓮華経の五字」である。（本尊抄184頁）

問六 「八品を説いて」（247頁16行目）について、該当する経文を順にすべて答えなさい。

（從地）涌出品第十五・如来寿命品第十六・分別功德品第十七・随喜功德品第十八・法師功德品第十九・常不輕（菩薩）品第二十・（如来）神力品第二十一・嘱累品第二十二（本尊抄184頁）

問七 「其の本尊」（247頁16行目）について、具体的に答えなさい。

釈尊・多宝という偉大な仏を脇土とし、南無妙法蓮華経こそが、これらの仏をも生み出した根源の仏種であることを端的に示し、寿命品の文の底意として示された法である、法華経本門の文底の下種の本尊。（本尊抄186頁）

問八 「其の本尊の爲体」（247頁16行目）について、「御義口伝」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿命品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に靈山に於て面授口決せしなり、本尊とは法華経の行者の一身の当体なり（御書760頁）

問九 「本師の娑婆の……表する故なり」（247頁16行目～248頁1行目）について、具体的に答えなさい。

地涌の菩薩が、末法において広めるよう付囑を受け、そして機根の劣った凡夫が受持して成仏するために顕された本尊。（本尊抄184頁）

問十 「此の仏像」（248頁1行目）について、具体的に答えなさい。

寿命文底下種の法として示され、末法の衆生に説き示して信受せしめ入るべき法を体現している仏の姿形との意であって、木像・絵像の仏像をいうのではない。（本尊抄186頁）

「答えて曰く……難信難解・随自意なり」(248頁7行目～249頁4行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「序分」(248頁8行目)・「正宗」(248頁8行目)・「流通分」(248頁8行目)を、それぞれ説明しなさい。

序分＝**經典の因縁・由来を説く序論の部分**

正宗(分)＝**一經の中心・核となる部分**

流通分＝**經典を広める流通のことを、仏が弟子に促した部分や正宗分を補って説明した部分**

(本尊抄194頁)

問二 「寂滅道場より……流通分なり」(248頁8行目～9行目)について、この三段は何と呼ぶかを概要も含めて答えなさい。

釈尊の一代にわたるすべての教えをひとまとまり)一經とつらえ、序文・正宗分・流通分の3段に分けていることから、「一代一經三段と呼ぶ。」(本尊抄195頁)

問三 「正宗十卷の……流通分なり」(248頁9行目～11行目)について、何と呼ぶかを概要も含めて答えなさい。

法華經並びに開結一經(無量義經・普賢經)の中でも、諸經には説かれていない二乗作仏・久遠実成を明かし、開三顯一開近顯遠を行うという教えの根本部分であることから、「法華十卷三段と呼ぶ。」(本尊抄195頁)

問四 「方便品より……正宗分なり」(248頁9行目～10行目)について、この正宗分で根本となる二つの教説を答えなさい。

諸經の声聞・緣覺・菩薩のための三種の教えは法華經で明かされた成仏の教えへ導くための方便であるとした「開三顯一」。(本尊抄196頁)

始成正覺を開いて久遠実成を顯した「開近顯遠」。(同頁)

問五 問二・問三で答えたものを合わせて何と呼ぶかを、概要も含めて答えなさい。

釈尊の根本の教えを概括的に示すことにより、「二往總の三段と呼ぶ。」(本尊抄196頁)

問六 「又法華經等の……四味の者の如し」(248頁12行目～18行目)について、何と呼ぶかを概要も含めて答えなさい。

「本無今有の百界千如」の教えを説かれたのは、迹門の教主の始成正覺の仏である。この迹門は、過去の下種・結縁を調査成熟させるという熟益を主たる目的とするところから、「迹門熟益三段と呼ぶ。」(本尊抄201頁)

問七 「本無今有の百界千如を説いて」(248頁14行目)について、「開目抄」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱したり、しかりといえどもいまだ発迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず (御書197頁)

問八 「又本門十四品の……随自意なり」(249頁1行目～4行目)について、何と呼ぶかを概要も含めて答えなさい。

本門の教主である久遠元初の釈尊に即して、本有常住の事の一念三千が明かされたことにより、凡夫の一念に無始の十界と国土が具わることを知る一方、あくまでも文上であらうから、「本門脱益三段と呼ぶ。」(本尊抄207頁)

問九 「寿命品と前後の二半」(249頁1行目)について、具体的に説明しなさい。

(從地)涌出品第十五の後半・(如來寿命品第十六・分別功德品第十七の前半を合わせた)「一品二半」をいう。(本尊抄206頁)

問十 「所説の法門も……竹膜を隔つ」(249頁2行目～3行目)について、具体的に説明しなさい。

文底の眞の事の一念三千という観点から見れば、本門の事の一念三千と迹門の理の一念三千は、わずかな差ではない。(本尊抄208頁)

法梅蓮の
教学試験発心教材⑨／観心本尊抄（第24・25章） 解答例
〈青年部教学試験1級 対応版〉

「又本門に於て……但題目の五字なり」（249頁5行目）17行目の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「又本門に於て……序分なり」（249頁5行目）6行目について、具体的に説明しなさい。

寿量文底の観心たる妙法のみが衆生成仏の要法である。したがって、三世諸仏の一切の經典はすべて、この妙法をあらわすための序文となる。（本尊抄217頁）

問二 「一品二半」（249頁6行目）について、天台と日蓮大聖人の配立はそれぞれ何と呼ぶかを概要も含めて答えなさい。

天台⇨涌出品の略開近願遠から始まり、寿量品の広開近願遠をまむもので、在世の衆生に対する脱益のための教えであることから、「略広開願の一品二半」と呼ぶ。（法華経464頁）
大聖人⇨略開近願遠をまみず、動執生疑の部分から始まり、もっぱら滅後、その中でも末法の凡夫のためであることわねることより、「広開近願遠の一品二半」と呼ぶ。（法華経467頁）
（本尊抄216頁）

問三 「種熟脱」（249頁9行目）について、それぞれ説明しなさい。

種⇨仏が衆生に、仏になるべき種子を下すことで、仏法に縁した最初が「下種」
熟⇨機根を調べ、過去に下種された仏の種子を徐々に成長させることが「調熟」
脱⇨仏種が成長し終わって、仏の境地を得ることが「得脱」
（本尊抄214頁）

問四 「迹門十四品の……但題目の五字なり」（249頁10行目）17行目について、具体的に説明しなさい。

法華経の迹門・本門とも、末法の衆生のために説かれたことが示され、寿量文底の下種益の妙法たる題目の五字、すなわち南無妙法蓮華経が末法に流通すべき法であることが明かされる。（本尊抄225頁）

問五 釈尊の一代聖教および三世十方の諸仏の経々が、問一の序分と流通分に配されるが、その違いを説明しなさい。

仏の覚りである寿量文底の妙法が説き現されていない段階の序分と、説き現された後に妙法の説明に用いられる一切の經典の流通分との違い。（本尊抄227頁）

問六 「在世の本門」（249頁17行目）について、具体的に答えなさい。

五重三段の第四の文上脱益の本門（本尊抄225頁）

問七 「一往之を……登らしむ」（249頁15行目）について、具体的に説明しなさい。

化城喩品と寿量品に基づき、在世の衆生に対する種熟脱の化導を述べたもの。（本尊抄225頁）

問八 「在世の本門と末法の始は……五字なり」（249頁17行目）は、三点にわたり対比して種脱相対を明かしています。このうち、「在世の本門」と「末法の始」の相違を述べられている一点を答えなさい。

目的の違いとして、「在世の本門」は脱益のため、「末法の始」は下種益のため。（本尊抄226頁）
教法の違いとして、「在世の本門」は「一品二半」、「末法の始」は「但題目の五字」。（同頁）

問九 右の表を完成させなさい。（本尊抄226頁）

五重三段			一往総の三段		
再往別の三段			一往総の三段		
			一代一經三段	爾前經	正宗分
			法華十卷三段	無量義經・法華經序品	方便品／分別功德品の前半
			迹門熟益三段	無量義經・法華經序品	方便品／人記品
			本門脱益三段	從地涌出品の前半	一品二半（從地涌出品の前半、如来寿量品、分別功德品の前半）
			文底下種三段	一切の仏の無数の經典	内証の寿量品（日蓮大聖人が立てた一品二半、寿量文底下種の南無妙法蓮華経）
					流通分
					涅槃經
					分別功德品の後半／普賢經
					法師品／安樂行品
					分別功德品の後半／普賢經
					一切の仏の無数の經典

「問うて曰く其の証文如何、……撰拾遺囑是なり」（249頁18行目～252頁17行目）の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「前三後三の六釈」（250頁8行目）を説明しなさい。また、これについて大聖人が挙げられている要点二点を答えなさい。

前三義① 他方の菩薩はそれぞれの国土において自己の任務がある。

前三義② 他方の菩薩は娑婆世界との結縁が薄い。

前三義③ 他方の菩薩に弘法を許せば、地涌の菩薩を召し出すことができず、開近顕遠ができなくなる。

後三義① 地涌の菩薩は久遠の仏の本眷属である。

後三義② 地涌の菩薩は娑婆世界に結縁深厚である。

後三義③ 地涌の菩薩を召し出すことによって、開近顕遠を示すことができる。

（本尊抄235頁）

① 末法の初めは謗法の国土であり、衆生の機根は悪機であるから、迹化・他方の菩薩では寿量品の肝心である南無妙法蓮華經の弘通に耐えられない。

② 迹化の菩薩は久遠の釈尊によって初めて発心した久遠の弟子ではない。

（本尊抄237頁）

問二 「我等は復た…疑を生ぜじ」（250頁14行目～17行目）について、具体的に説明しなさい。

この涌出品の「動執生疑」の文は、仏の滅後の衆生のために行われた説法であることを示す。（本尊抄245頁）

問三 「心を失わざる者は…病尽く除癒ぬ」（250頁18行目～251頁1行目）について、具体的に説明しなさい。

久遠の昔に下種され、大通智勝仏らによって法華經と結縁し、法華經迹門までの教えを受け、法華經本門で得脱した在世の衆生（本尊抄245頁）

問四 「余の心を…薬を服せしむべし」（251頁2行目～4行目）について、具体的に説明しなさい。

仏が入滅という方便を用いて、滅後の衆生のために残した法（良薬を信じさせる）という寿量品の主題を明かす。

（本尊抄246頁）

問五 「遣使還告（251頁5行目）」と「是好良薬」（251頁4行目）について、それぞれ具体的に説明しなさい。

遣使還告 末法の四依である地涌の菩薩

是好良薬 寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華經

（本尊抄250頁）

問六 「名体宗用教（251頁10行目）」を、説明しなさい。

天台が法華經の経題を解釈するために用いた「五重玄」のこと。 「名」は経題の解釈の「釈名」、「体」は一經の究極の真理をつまびらかにする「弁体」、「宗」は一經の宗要を明かす「明宗」、「用」は一經の功德・力用を論ずる「論用」、「教」は一經の教相を判する「判教」とある。（本尊抄249頁）

問七 「夫れ文殊師利菩薩は…足らざる者か」（251頁14行目～17行目）について、具体的に説明しなさい。

文殊・観音・薬王・普賢の諸菩薩は皆、不動仏や西方の無量寿仏など、他土の仏の弟子であって、釈尊の化導を助けるために娑婆世界に來た菩薩である。また、爾前迹門の菩薩であって、久遠の妙法五字を持っていないゆえに、末法にその法を広める能力がないゆえに、付囑を受けられないと明かされている。（本尊抄261頁）

問八 「要を以て之を…宣示顯説す」（252頁5行目～9行目）を、それぞれ問五の「名体宗用教」に配しなさい。

名 如来の一切の所有の法

宗 如来の一切の甚深の事

教 宣示顯説

体 如来の一切の秘要の蔵

用 如来の一切の自在の神力

（本尊抄262頁 参考資料「四句の要法」を参照）

問九 前問の経文を、それぞれ「三大秘法」に配しなさい。

本門の本尊 如来の一切の秘要の蔵
本門の題目 如来の一切の甚深の事

本門の戒壇 如来の一切の自在の神力

（参考資料「四句の要法」を参照）

問十 「結要付囑・総付囑・撰拾遺囑」について、それぞれ説明しなさい。

結要付囑 神力品第二十二で、仏が四菩薩に「妙法蓮華經の五字」を授与する。（法華經571頁～572頁、本尊抄262頁）
総付囑 別付囑・結要付囑の後、囑索品第二十二で、すべての菩薩たちに法華經を付囑する。（法華經577頁）
撰拾付囑 虚空会の儀式終了後、薬王品第二十二以下涅槃經までは、この説法に漏れた衆生のために、迹化や他方の菩薩らに對して、重ねて法華經なことを付囑する。（本尊抄266頁）

「疑つて云く……世法を得可きか」(252頁18行目～254頁17行目)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「疑つて……黙止せんのみ」(252頁18行目～253頁3行目)について、説明しなさい。

寿命品では、釈尊が弟子に、これから説く教えを信受するうちに告げ、その都度弟子は信受を誓って説法を請い、さびに重ねて四度目の要請を受けた仏が説法する三誠四請の儀式を踏まえられたものである。(本尊抄274頁)

問二 「病者に於いて」(253頁8行目)について、具体的に説明しなさい。

末法の衆生は、なかなか正法を信じず、かえって誹謗する。このように誹謗法の毒気によって本心を失い、正法を信じようとしてない最も病の重い末法の衆生。(本尊抄276頁)

問三 「像法の中末に……義を尽せり」(253頁11行目～13行目)について、具体的に説明しなさい。

像法時代には迹化の菩薩の示現である天台大師らが示したのは、法華経迹門を表とし、本門を裏として百界千如・一念三千を説いた「迹面本裏」である。この天台の一念三千は、本門寿命品で明かされる、常住の仏と衆生と国土が示されておらず、理として衆生の一念に三千が具わることを説いたにすぎない。(本尊抄280頁)

問四 「像法の中末に……故なり」(253頁11行目～14行目)について、「本因妙抄」ではどのように仰せになられているかを答えなさい。

「迹門を理員の一念三千と云ふ脱益の法華は本迹共に迹なり、本門を事行の一念三千と云ふ下種の法華は独一の本門なり」(御書295頁)または、「今日熟脱の本迹二門を迹と爲し久遠名字の本門を本と爲す」(同頁)

問五 「因謗墮惡必因得益」(253頁17行目)について、具体的に説明しなさい。

「逆縁を説く『法華文句記』の文を引用し、末代幼稚の凡夫は、仏種である妙法を聞いても、信じないばかりか、かえって誹謗する。たとえ、それが因となって惡道に墮ちたとしても、必ず妙法を聞いたことと下種結縁するので、最終的には成仏という大利益を得ることができるのである」と示されている。(本尊抄288頁)

問六 「末法の初に出で給わざる可きか」(254頁1行目)について、具体的に説明しなさい。

久遠の弟子であるにもかかわらず、仏の成道と入滅の時に姿を現さなかったばかりか、迹門十四品の説法にも参加せず、涌出品から囑累品までは現れたものの、薬王品以降には座を立てしまった。これほどの「不幸の失」を行ったのであるから、三仏との約束を違えるはずがなく、末法の初めに必ず出現するはずである。(本尊抄289頁)

問七 「此の四菩薩……弘持す」(254頁1行目)の「折伏・」摂受について、それぞれ説明しなさい。

折伏を現する時 現実社会の中で困難と戦いながらも妙法を広め、その力を社会・文化などの面で具体的に顕現させ、民衆を救済する実践を行うこと。

摂受を行う時 僧となって、法の正邪を明らかにし、正法を説き明かしていくこと。

(本尊抄288頁)

問八 「代を語れば……以有るなり」(254頁6行目～7行目)について、説明しなさい。

時代を語れば、像法時代の終わりであり末法の初めである。その土地は唐の東であり、羯の西である。その時代の人々は五濁が盛んで、闘諍が絶えない。法華経法師品の「釈尊の在世です」の怨嫉が多い。滅度の後はさらに怨嫉が多くなる」との言葉は、まことに意味深い。(本尊抄295頁)

問九 「月支震旦に……顕わさず」(254頁9行目～12行目)について、説明しなさい。

法華経の実義である「本門の本尊」は地涌の菩薩に譲り与えられ、仏勅を受けて大地の下で「時」を待って正法・像法時代に出現しなかったことが、「本門の本尊」が顕されなかった理由である。(本尊抄301頁)

問十 「此れを以て……先兆なるか」(254頁14行目～15行目)について、説明しなさい。

当時の人々が抱いた大きな不安や恐れは、諸大が起こした現象ではなく、地涌の菩薩が出現して大法を建立するという、仏法上の大きな出来事が起きようとする前兆であること。(本尊抄304頁)

「一念三千を……者なり」(254頁18行目～255頁1行目)及び、『送状』(255頁)の御文について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「大慈悲」(254頁18行目)について、元意をどのようにとらえることができるかを答えなさい。

大難を耐え忍び凡夫成仏の法を弘通する戦いを貫く御本仏・白蓮大聖人の大慈悲であること。 (本尊抄312頁)

問二 「五字の内に此の珠を裹み」(254頁18行目)について、具体的に説明しなさい。

末法の衆生は、妙法蓮華經の五字である御本尊を受持することによって、必ず守られて成仏できることの御本尊の大力を示されている。 (本尊抄311頁)

問三 「懸けさしめ給う」(254頁18行目)について、どのように拝されるかを答えなさい。

遣使還告の上行菩薩である日蓮大聖人は、教相上は仏の弟子であるが、妙法蓮華經を末法に弘通する実践においては、末法の衆生を救う大法を初めて明かし弘める末法の御本仏であられると拝することができる。

(本尊抄312頁)

問四 「四大菩薩」(254頁18行目)について、具体的に説明しなさい。

妙法蓮華經の五字を弘める遣使還告の地涌の菩薩は、教相の上からは仏の久遠以来の弟子であるが、その意味するところは久遠以来の法華經を所持する人であり、仏種である妙法蓮華經の五字に習熟する菩薩。 (本尊抄311頁)

問五 「此の人を守護し給わん」(255頁1行目)について、説明しなさい。

この御本尊を持ち南無妙法蓮華經と唱える人は、必ず成仏できる仏の子であり、仏の弟子である四大菩薩が仏の子を守るのとは当然のことである。 (本尊抄313頁)

問六 「一念三千を……者なり」(254頁18行目～255頁1行目)について、日寛上人はどのように述べられているかを答えなさい。

我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり。「幼稚の頸に懸けさしめ」の意、正しく此れに在り。故に唯仏法力を仰ぎ、応に信力・行力を励むべし。一生空しく過して万劫悔いることなかれ (日寛上人文段集548頁参照)

問七 『送状』の「此の事日蓮身に当るの大事なり」について、具体的に説明しなさい。

末法万年の広宣流布のため、一切衆生の成仏の根本である御本尊が明かされ、いまだかつて誰も明かしていない法門であることを示されている。 (本尊抄309頁)

問八 『送状』の「無二の志を…読むこと勿れ」について、どのような大聖人のご配慮が伺えるかを答えなさい。

この書を読んでも信心がなければ、かえって誹謗や退転の心を抱き、成仏の軌道から外れることになるだろうし、同時に大聖人は佐渡流罪中の身でもあり、本抄を与えられた門下の身に危害が及ばないようこの配慮。 (本尊抄309頁)

問九 『送状』の「之を演説す」について、具体的に説明しなさい。

「願わくは、この書を一見した者は、師弟ともに靈山浄土に詣でて、釈迦・多宝・分身といふ三仏のお顔を拝見したいものである」と、この書に触れた人々を、一人も漏らさず仏の境涯に、この大聖人の御心である。 (本尊抄309頁)

『兄弟抄』について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 本抄が執筆された背景を答えなさい。

本抄は、文永12年(1275年)に、武蔵国池上の門下である兄・宗仲(左衛門大夫志)が、法華經の信仰に反対する父・康光(左衛門大夫より、勘当される)との報告を受けた大聖人が、兄・宗仲と弟・宗長(兵衛志と、その夫人たちに送られた激励のお手紙である(現在では建治2年(1276年)の御述作と考えられている。池上家は、代々幕府に仕えていた有力工匠であったため、勘当は家督相続権を失い、経済的な基盤も社会的な身分も奪われるという、大変厳しい圧迫である。しかも、父に従えば、弟が家督相続権を譲り受けることができる。ゆえに、大聖人は、特に弟・宗長の信心が揺らぐことを心配され、さまざまの角度から激励されている。(大白 80 頁)

問二 本抄の大意を答えなさい。

初めに法華經こそが最勝の經典であることを示され、法華經を捨てる罪の重さについて述べられ、法華經を説く人には巡り合い難いことが示される。続いて、信心に励む者に難が競い起るのは、その人自身の過去世の謗法の報いを現世に軽く受けて消滅させる「転重軽受」の法門を説かれ、難は諸天善神が兄弟の信心を試すために与えた試練であると教えらる。そして、「三障四魔が競い起る」のは、兄弟が正法を実践し、着実に信心を深めてきた証拠であり、兄弟とその夫人たちが団結して信心根本に難を乗り越えていくように励まされている。(大白 81 頁)

問三 「法華經と申すは…骨髓なり」(1079 頁 1 行目)について、説明しなさい。また、「秋元御書」ではどのようにお示しになっているかを答えなさい。

法華經二十八品が八万法蔵の肝心であるというのが一往の義である。再往は、法華經とは南無妙法蓮華經の五字七字である。法華經が尊いというのも妙法を秘枕しているからであり、南無妙法蓮華經こそ、肝心中の肝心であり、骨髓である。(大白 83 頁)

三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へり (御書 1403 頁 大白 83 頁)

問四 「此の経を經のごとくにとく人に値うことは難にて候」(1080 頁 16 行目) 17 行目)について、説明しなさい。

法華經の究極は、一念三千の法門であり、一念三千の法門は法華經にしか説かれていない。法華經本門壽量品の文底に秘し沈められた南無妙法蓮華經の題目を明らかに説く人こそ、末法の御本仏日蓮大聖人以外に断じてあり得ない。末法の御本仏こそ、仏法の本流を教えられたあいがたき根本の師であることを示している。(大白 84 頁)

問五 「此の世界は第六天の魔王の所領なり」(1081 頁 15 行目)について、説明しなさい。

六道輪廻の世界を示す三界(欲界・色界・無色界)のうち、「欲界」(欲望の世界)の六欲天の最上である(他化自在天)に君臨し、衆生の生命を支配している王といわれている。(大白 87 頁)

問六 「元品の無明」(1081 頁 6 行目)について、「御義口伝」ではどのようにお示しになっているかを答えなさい。

元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ひ可し (御書 751 頁 大白 87 頁)

問七 「各各・随分に…やけば真金となる」(1088 頁 11 行目) 12 行目)について、具体的に説明しなさい。

強盛な信心を貰っていくと、過去世の重罪を責め出して、今世に苦難の果報を受けているのである。重罪の報いを一時軽く受けて、罪業をすべて消滅させる「転重軽受」の法理は、我々の信仰が宿命に真正面から立ち向かう中だからこそ、強くなるのである。(大白 90 頁)

『兄弟抄』について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「雪山童子の前に現れし羅刹は帝釈なり尸毘王のはと毘沙門天ぞかし」(1083 頁 13 行目) 14 行目について、説明しなさい。

一往は、帝釈や毘沙門天・羅刹が、鳩などの姿としてあらわれ、雪山童子・尸毘王の信心を試したという譬えであるが、再往は、いかなる大難・迫害にも屈することなく、強い信心をもって戦っているならば、必ず、諸天神が護るとの原理を示されている。また、鳩が毘沙門天に変わったという譬えは、無力な一庶民だった者が、弱い者に対する限らない慈愛によって、力強い民衆の指導者へと成長し、真実の人材を育てることができるとも推せる。(大白 91 頁)

問二 「一切は・をやに…孝養の本にて候か」(1085 頁 7 行目) 8 行目について、具体的に説明しなさい。

父母は尊ぶべきであっても、凡夫であることには変わりがない。たとえ、親や家族に反対があっても、初めに信心した者が、仏道修行に励み、自分の生活に御本尊の功德を証明していくならば、必ずや反対の家族や親も、ともに信仰できるようになり、最高に幸福な家庭を建設することができる。(これこそ最高の孝養である。)(大白 93 頁)

問三 「天台大師の摩訶止観」(1087 頁 10 行目) について、説明しなさい。

天台大師が講述したものを弟子の章安大師が筆録し、『法華玄義』『法華文句』とともに「天台三大部」とされる。この『摩訶止観』は、全十巻よりなり、法華經の觀念觀法の実踐修行を説き、一心三觀、一念三千の法門が説かれていることより、天台の出世の本懐であり、像法時代の法華經とされている。(大白 95 頁)

問四 「魔競はずは正法と知るべからず」(1087 頁 16 行目) について、どのような意味が含まれているかを答えなさい。
また、生命論の上から魔の本質を示されている御文二編を答えなさい。

(前文を受けて)魔が競うようではければ正法とはいえない。(大白 95 頁)

法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と願われ元品の無明は第六天の魔王と願われたり (御書 97 頁)

元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入つて、仏をめだめて説かせまいらせじとせしなり (御書 133 46 頁)

問五 「三障四魔」(1087 頁 16 行目) について、説明しなさい。

「三障」とは、信心修行の実踐する上で立ちちはだかつて妨げる働きである三つの障りをつい、三毒貪の瞋の癡(なごの煩惱)による信心修行の妨げを「煩惱障」。生命に刻んだ悪業によつて生じる信仰の妨げを「業障」、過去世の悪業の報いとして今世で受けた境涯が妨げとなる「報障」をいう。また、「四魔」とは、信仰者の生命の内側から、その輝きを奪う働きをいい、五陰色陰・受陰・想陰・行陰・識陰の活動が不調となつて修行の妨げとなる「陰魔」、煩惱による信心の破壊を「煩惱魔」、修行者自身の生命が奪われたり、修行者の死によつて周囲の者が信心に疑いを生じさせる「死魔」、他化自在天子魔、第六天の魔王にによる信心を破壊する「天子魔」をいう。(大白 96 頁)

問六 「心の師とはなるとも心を師とせざれ」(1088 頁 15 行目) について、具体的に説明しなさい。

苦境に陥った時、揺れ動いて「心を師」としては、人生の勝利を開くことはできない。絶対的幸福という目的を見据え、「心の師」という確固不動の「法」を求める、すなわち御本尊根本、御書根本の姿勢で、揺れ動くことのない不動の根拠を築く以外にないのである。(大白 99 頁)

問七 「只法華經の事のみさくらせ給うべし」(1081 頁 16 行目) について、「御義口伝」ではどのようにお示しになられているかを答えなさい。

我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち自在なり (御書 789 頁)

法華の
教学試験発心教材⑮

／ 日顕宗を破す (一)

解答例

〈青年部教学試験1級対応版〉

日顕宗について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 仏法破壊の「法を壊ぶる者」を断罪し、呵責している「立正安国論」の御文を答えなさい。

法を壊ぶる者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子・真の声聞なり (御書 26 ページ 大白 102 ページ)

問二 「法華経の敵について、日蓮大聖人はどのように仰せになられているか、二つ答えなさい

信心ふかきものも法華経のかたきをばせめず、いかなる大善をつくり法華経を千万部讀み書写し一念三千の觀道を得たる人なりとも法華経の敵をだにもせめざれば得道ありがたし (御書 1494 ページ 大白 101 ページ)

法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀とにも無間地獄は疑いなるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に墮ちん」云云、謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし (御書 1056 ページ 大白 102 ページ)

問三 私たちが、現在の日蓮正宗(以下、「宗門」と称す)を「日顕宗」と呼称する理由を答えなさい。

前法主の日顕が支配し、日蓮大聖人の仏法の教義と御精神に真つ向から違背した謗法の教団となったからであり、法主が日如に代わっても、日顕の謗法の濁流は変わらないため、「日顕宗」と呼んでいる。(大白 101 ページ)

問四 仏法上の大罪である「五逆罪」をすべて答えなさい。

父を殺す・母を殺す・阿羅漢を殺す・仏身より血を出す・和合僧を破る(破和合僧) (大白 102 ページ)

問五 「仏法西還」と「世界広宣流布」予言されている御文を、それぞれ答えなさい。

仏法西還 月は西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是への如し正像には西より東に向い未法には東より西に往く (御書 508 ページ 大白 105 ページ)
世界広宣流布 大集経の白法隠没の時に次いで法華経の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑つべからざるか (御書 265 ページ 大白 同ページ)

問六 戦時中に宗門が犯した、謗法を三つ答えなさい。

- ① 軍部政府より神札を受け、さらに学会側にも強要。
- ② 御書の刊行を禁止する「院達」(宗務院)の通達を発布。
- ③ 国家神道と衝突するところをえられた14カ所におよぶ御書の御文を削除。(大白 105 ページ)

問七 「第一次宗門事件」について答えなさい。

昭和52年(1977年)前後から54年にかけて、日蓮正宗の末寺等で僧による学会批判が繰り返され、その裏では一部の学会幹部と僧による池田先生(当時 第3代会長と学会員の分断を謀るという謀略があった。その攻撃から学会員をせよ、僧俗和合を図るために、昭和54年4月、ついに池田先生は会長職を辞し、名誉会長となる。(大白 106 ページ)

問八 「第二次宗門事件」について答えなさい。

平成2年(1990年)12月、日顕法主当時らが宗門の宗規を一方的に変更し、池田先生の法華講義講頭罷免等を通告すること、学会員信徒を宗門に隷属せよとすることを「創作戦(創価学会分離作戦)」を企て、学会の切り捨てを図った。この宗門の暴挙に対し、学会側は御書に基づいて明確に反論し、話し合いによる解決を求めたが、宗門側は一切を拒否し、ついに平成3年11月、学会員に対しての御本尊の授与を停止し、学会を破門するといった暴挙に出る。(大白 106 ページ)

問九 創価学会が全世界の会員に、御本尊を授与する正当性を示した御文を答えなさい。

此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱ふる胸中の肉団におはしますなり、(中略)此の御本尊も只信心の二字にこそまわり (御書 1244 ページ 大白 107 ページ)

問十 日興上人の根本精神は、どのような遺誠であるかを答えなさい。

未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事 (御書 1618 ページ 大白 109 ページ)

日顕宗について、あとの問いに簡潔に答えなさい。

問一 「法主が御本尊」、また「日蓮大聖人と一体不二の尊体」であるなどという邪義について、御書を以って破折しなさい。

唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊是なり (御書1606頁 大白1111頁)

問二 「法主は絶対であるから法主に従え」いう「法主信仰」の邪義について、御書を以って破折しなさい。

時の實首為りと雖も仏法に相違して己義を構えは之を用う可からざる事 (御書1618頁 大白1111頁)

問三 法主が誤りを犯すこともありうることに付いて、御書ではどのようにご教示されているかを答えなさい。

先師の如く予が化儀も聖僧為る可く、但し時の實首或は習字の門に於ては設け一旦の矯犯有りと雖も衆徒に差置へ可き事 (御書1619頁 大白1111頁)

問四 「血脈について、①妙法を自らの当体として信受する信心、②絶対不退の信心の持続、③異体同心に広宣流布を目指す信心、以上の3点について大聖人はどのように仰せになられておられるかを答えなさい。

- ① 久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり
- ② 過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華經を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり
- ③ 總じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する處の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か

問五 「三宝義」について、日顕宗はどのように主張しているかを答えなさい。

「末法下種の僧宝」歴代法主とすり替え、日顕への信伏随従を強要し、さらに「三宝一体義を乱用し」、「法主・日顕が、仏宝・日蓮大聖人、法宝・大御本尊と一体であるかのように述べている。」 (大白114頁)

問六 平成2年12月、学会宛てに送付された宗門総監名での公式文書「あたかも僧侶がまったく対等の立場にあるように言うのは、信徒としての節度・礼節をわきまえず、僧俗の秩序を失うものである」について、二つの御文を以って破折しなさい。

此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華經を持たせ給う人は一切衆生のしつとこそ仏は御らん候らめ (御書1134頁 大白1115頁)

法師品には若是善男子善女人乃至則如来使と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり (御書1448頁 大白8頁)

問七 平成3年10月、学会宛てに送付された宗門総監名での葬儀に関する「通告文」なる文書「僧侶を呼ばずに葬儀を行えば、即身成仏どころか必定墮地獄となります」について、二つの御文を以って破折しなさい。

されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり (御書1423頁 大白116頁)

故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いなし (御書1506頁 大白同頁)

問八 日蓮大聖人と日興上人は、僧侶の在り方について、どのように仰せになられているかを答えなさい。

大聖人 但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ (御書1056頁 大白117頁)
日興上人 先師の如く予が化儀も聖僧為る可し (御書1619頁 大白同頁)

問九 日蓮大聖人は仏法利用の悪侶について、どのように仰せになられているか、三つ答えなさい。

出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道の弟子なりと仏記し給へり (御書958頁 大白117頁)
謗法の者を責めずして徒らに遊戲雑談のみして明し導きせん者は法師の皮を著たる畜生なり (御書1586頁 大白同頁)
法を壞ぶる者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり (御書26頁 大白同頁)

法華經の構成・概要

迹門——『始成正覺』を顕す

本門——『久遠実成』を明かす

(前)靈鷲山会

虚空会

(後)靈鷲山会

序品第一	一巻
方便品第二	一巻
譬喩品第三	二巻
信解品第四	二巻
藥草喩品第五	三巻
授記品第六	三巻
化城喩品第七	三巻
五百弟子受記品第八	四巻
授学無学人記品第九	四巻
法師品第十	四巻
見宝塔品第十一	四巻
提婆達多品第十二	五巻
勸持品第十三	五巻
安樂行品第十四	五巻
從地涌出品第十五	六巻
如來壽量品第十六	六巻
分別功德品第十七	六巻
隨喜功德品第十八	六巻
法師功德品第十九	六巻
常不輕菩薩品第二十	七巻
如來神力品第二十一	七巻
囑累品第二十二	七巻
藥王菩薩本事品第二十三	八巻
妙音菩薩品第二十四	八巻
觀世音菩薩普門品第二十五	八巻
陀羅尼品第二十六	八巻
妙莊嚴王本事品第二十七	八巻
普賢菩薩勸發品第二十八	八巻

序品…靈鷲山の会座に大衆が集まり、釈尊がさまざまな瑞相を現ずる。

方便品…説法開始。諸法実相・十如是の法理が示され、また一乗の教えを説くことが仏の出世の本懷であることが明かされる。【諸法実相と二乗作仏】

譬喩品…法理を領解した舍利弗への授記。理解できない弟子のため、『三車火宅の譬え』※を用いて説法する。

信解品…四大声聞(須菩提(しゅぼだい)・迦旃延(かせんねん)・迦葉・目連)が領解した旨を『長者窮子(ぐうじ)の譬え』※として示す。

藥草品…四大声聞の領解を承認。『三草二木の譬え』※を用いて、仏の慈悲が平等であることを説く。

授記品…四大声聞への授記。

化城品…三千塵点劫という昔、大通智勝仏の16番目の王子(釈尊の過去世の姿)から化導されたのが在世の衆生であることが説かれる。『化城宝処の譬え』※。

受記品…富楼那(ふるな)への授記。さらに授記を得た五百人の弟子が歡喜して『衣裏珠(えりじゆ)の譬え』※を述べる。

人記品…阿難、羅睺羅(らごら)をはじめ、学(学ぶべきことが残っている者)・無学(学ぶべきことが残っていない者)二千人の弟子に授記。

法師品…法華經の弘通者(法師)、五種の妙行(受持・読・誦・解説(げせつ)・書写)と弘通の方軌(衣座室の三軌)を明かす。【猶多怨嫉・況滅度後】

宝塔品…宝塔が出現し、多宝如来が、釈尊の説法は真実であることを保証する(多宝の証明)。虚空会の説法の開始。【六難九易】

提婆達多品…提婆達多への授記(悪人成仏)と竜女の即身成仏(女人成仏)が説かれる。

勸持品…菩薩による滅後弘通の誓い。「二十行の偈」で三類の強敵を示し、仏滅後の弘通者が必ず迫害を受けることを説く。【三類の強敵】

安樂行品…初信の行者のために身・口・意・誓願の四安樂行という摂受の修行を示す。『髻中明珠(けちゅうみょうじゆ)の譬え』※。

※ 法華經七譬(しちひ)

涌出品…地涌の菩薩の出現。弥勒(みろく)菩薩の問いに対し、釈尊が、久遠の昔から教化してきた弟子であると説く。【地涌の菩薩】

寿量品…“久遠五百塵点劫に成道(じょうどう)して以来、娑婆世界で衆生を教化してきた仏である”と釈尊の本地を明かす。『良医病子の譬え』※で説明。【久遠実成】

分別功德品…法華經の功德について、在世の四信と滅後の五品があることを示す。

隨喜功德品…五十展転(てんでん)の功德を説いて、滅後に法華經を広めることを勧める。

法師功德品…滅後弘通の法師が六根清淨(しょうじょう)の功德を受けることを説いて、法華經の弘通を勧める。

不輕品…釈尊の過去世の姿である常不輕菩薩が万人を敬う礼拝行を實踐して罪障消滅の功德を得たことを説く。【不輕菩薩】

神力品…地涌の菩薩が滅後の弘通を誓った時、釈尊が十神力を示し、滅後の弘通を上行菩薩をはじめとする地涌の菩薩に託す(別付囑)。【地涌の菩薩】

囑累品…全ての菩薩に付囑(総付囑)。十方の諸仏が本土に帰り、虚空会での説法が終了する。

藥王品…藥王菩薩の過去世を通して滅後弘通の功德を示し、十喩(じゅうゆ)を述べて法華經が諸經に対して第一であることを強調。釈尊滅後の広宣流布を予言する。

妙音品…妙音菩薩が三十四身を現じて妙法を弘通し、衆生を教化することを説く。

普門品…觀世音菩薩が三十三身を現じて衆生を教化することを示し、法華經の弘通を勧める。

陀羅尼品…藥王菩薩、勇施(ゆうせ)菩薩、毘沙門天、持国天、十羅刹女が神呪を説き、法華經の行者の守護を仏に誓う。

妙莊嚴王品…妙莊嚴王を夫人と息子たちが正法に帰依させた話を通し、法華經弘通の功德を示す。

勸発品…普賢菩薩が法華經の行者と法を守護するとの誓願を立てる。法華經の説法が終了し、会座の大衆は歡喜して去る。

【参考資料】

◆三類の強敵ゝ勸持品第十三 『二十行の偈』

末法悪世の時代に、法華経を弘める者には必ず「三類の強敵」が出現することが示されている。

唯願不為慮 於仏滅度後 恐怖悪世中 我等当広説 ①
有諸無智人 惡口罵詈等 及加刀杖者 我等皆当忍 ②
惡世中比丘 邪智心諂曲 未得謂為得 我慢心充滿 ③
或有阿練若 納衣在空閑 自謂行真道 輕賤人間者 ④
貪著利養故 与白衣說法 為世所恭敬 如六通羅漢 ⑤
是人懷惡心 常念世俗事 假名阿練若 好出我等過 ⑥
而作如是言 此諸比丘等 為貪利養故 説外道論議 ⑦
自作此經典 誑惑世間人 為求名聞故 分別説是經 ⑧
常在大衆中 欲毀我等故 向国王大臣 婆羅門居士 ⑨
及余比丘衆 誹謗説我惡 謂是邪見人 説外道論議 ⑩
我等敬仏故 悉忍是諸惡 為斯所輕言 汝等皆是仏 ⑪
如此輕慢言 皆当忍受之 濁却惡世中 多有諸恐怖 ⑫
惡鬼入其身 罵詈毀辱我 我等敬信仏 當著忍辱鎧 ⑬
為説是經故 忍此諸難事 我不愛身命 但惜無上道 ⑭
我等於來世 護持仏所囑 世尊自当知 濁世惡比丘 ⑮
不知仏方便 隨宜所說法 惡口而頻聲 數數見擯出 ⑯
遠離於塔寺 如是等衆惡 念仏告勸故 皆当忍是事 ⑰
諸聚落城邑 其有求法者 我皆到其所 説仏所囑法 ⑱
我是世尊使 処衆無所畏 我当善說法 願仏安穩住 ⑲
我於世尊前 請來十方仏 発如是誓言 仏自知我心 ⑳

《現代語訳》

① ただ願わくは御心配なさいませんに。仏が入滅されてから後、恐ろしい怖れのある悪世の中に於いて、我らは当に広く説くであらう。〔第一類 俗衆増上慢〕
② 多くの無知の人が悪口をいい、罵り及び刀杖を加える者があるうとも、我らは皆当にそれを忍ぶであらう。〔第二類 道門増上慢〕
③ 悪世の中の比丘は、まぢがった智をもつていて、心にひい諂へつゝいがあり、また得ていないものを、すでにこれを得たと思ひ、我執の心が充滿しているであらう。

《法華経41ページ421行》

④ あるいは山林の静かな場所ので、ボロ切れを継ぎ接ぎした衣を着て、誰もいないところにいて、自ら真実の道を行じていると思つて、人間を軽んじ賤しめている者があるであらう。
⑤ 財産を貪り自己の利益を求めることに貪著しているが故に、在家の人々のために法を説いて、世間から恭敬されることが、六神通を得た阿羅漢(聖者)の如くであらう。
⑥ この人が悪心を懷いて、常に世俗のことはかり心にいつも思ひ、その名前のついで、山林の静かな場所に住んでいるといふことをよりどころにして、我らの過失を数えあげること好んでいる。

⑦ しかもこのような言葉をいう、この多くの比丘たちは、財産を貪り、自己の利益を求めることに貪著しているがために、外道の論議を説き、自らこの經典を作成して、世間の人を誑たぶらかし惑わせ、名聞を求めようとするがための故、分別してこの経を説くのである」と。

⑧ このように常に大勢の人々の中で、我らをそしろうと欲するので、国王・大臣・バラモン・在家の人々、及びその他の比丘たちに向つて、我らを非難して悪口をいい、我らの悪を説いて「これはまぢがった考えの人である。外道の論議を説いている」といふ

⑨ 我らは仏を敬いたてまつるが故に、悉くこの多くの悪を忍ぶのであらう。彼らの為に軽んぜられて、「汝らは皆これ仏なのだ」といわれても、

⑩ このような軽蔑した高慢な言葉を、皆当に我らはじつと忍耐して受けるであらう。濁りに満ちた却という悪世の中には、多くの恐ろしい怖れがあるであらう。
⑪ 悪鬼がその身の中に入つたような人は、我を罵り、そしり辱めるであらうけれども、我らは仏を敬い信じたてまつることに由て、必ず当に忍耐の鎧を身につけるであらう。

⑫ この経を説かんがための故に、この多くの困難なことがらに耐え忍ぼう。我は一身の命を愛するのではなく、ただ無上の仏道だけを惜しんでいるのである。
⑬ 我らは来世に於いて、仏に委嘱されたところを護持しよう。世尊は自ら当に御存知であらう。濁りに満ちた世の悪い比丘は、

⑭ 仏が教化の方法として、ふさわしいように相手に応じて説かれる法を知らないで、悪口をいい眉を蹙(しかめ)、経を受持する者がしばしば追放されて、塔や寺から遠く離れさせられてしまふ。
⑮ このような多くの悪をも、仏の御告げをじつと心に思うが故に、皆当に「れらのことを忍ぼう」。

⑯ 多くの聚落や城市に、もしも法を求める者があるならば、我らは皆そのところに到り、仏に委嘱された法を説く。
⑰ 我は世尊の使者であるから、多くの人々に対処しても畏れることはない。我は当に善く法を説く。願わくは仏よ、安穩にとどまつておられますやうに。

⑱ 我は世尊の前と、多くの来集された十方の仏の前とで、以上のような誓願の言葉を発した。仏よ、どうか我の心を知られますやうに。
⑳ 我は世尊の前と、多くの来集された十方の仏の前とで、以上のような誓願の言葉を発した。仏よ、どうか我の心を知られますやうに。

【参考資料】『四句の要法』～如来神力品第二十一

爾時仏告上行等菩薩大衆、
諸仏神力如是無量無辺、不可思議。

若我以是神力、

於無量無辺百千万億阿僧祇劫、
為囑累故、説此経功德、猶不能尽。

以要言之、

如来一切所有之法、

如来一切自在神力、

如来一切秘要之藏、

如来一切甚深之事、

皆於此経宣示顯説。

是故汝等於如来滅後、

应当一心受持・読誦・解説・書写、如説修行、

所在国土、若有受持・読誦・解説・書写、

如説修行、若経巻所住之处、

若於園中、若於林中、若於樹下、

若於僧坊、若白衣舍、若在殿堂、

若山谷曠野、是中皆応起塔供養。

所以者何、当知是处即是道場。

諸仏於此得阿耨多羅三藐三菩提、

諸仏於此転於法輪、諸仏於此而般涅槃。

《四句の要法》

如来の一切の
所有の法

如来の一切の
自在の神力

如来の一切の
秘要の蔵

如来の一切の
甚深の事

宣旨顯説

爾の時、仏は上行等の菩薩大衆に告げたまわく、
「諸仏の神力は、是の如く無量無辺、不可思議なり。

若し我れは是の神力を以て、

無量無辺百千万億阿僧祇劫に於いて、
囑累の為めの故に、此の経の功德を説かんに、猶お尽くすこと能わじ。

要を以て之れを言わば、

如来の一切の有つ所の法、

如来の一切の自在の神力、

如来の一切の秘要の蔵、

如来の一切の甚深の事は、

皆な此の経に於いて宣示顯説す。

是の故に汝等は、如来の滅後に於いて、

应当に一心に受持・読誦・解説・書写し、説の如く修行すべし。

ある所の国土に、若し受持・読誦・解説・書写し、

説の如く修行すること有らば、若し経巻の住する所の処ならば、

若しは園中に於いても、若しは林中に於いても、若しは樹の下に於いても、

若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舍にても、若しは殿堂に在つても、

若しは山谷曠野にても、是の中に皆な応に塔を起てて供養すべし。

所以は何ん、当に知るべし、是の処は即ち是れ道場なり。

諸仏は此に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得、

諸仏は此に於いて法輪を転じ、諸仏は此に於いて般涅槃したまう」と。

〈法華経571ページ～573ページ〉

如来(仏)が所有しているすべての教法のこと。この句は五重玄義のうち**名玄義**、
三大秘法に配すると**一大秘法**(三大秘法総在の本尊)になる。

如来(仏)の一切に通達して無礙の力用をいう。神力は神通力のこと、一般の人間には計り知ることの
できない超人的で自由自在な能力をいう。仏・菩薩・阿羅漢・神仙人などが具えているとされる。
この句は五重玄義のうち**用玄義**、三大秘法では**本門の戒壇**に配される。

如来(仏)の秘めたる一切の要法の教え。仏が心に秘めた肝要の法門、奥義をいう。

二この蔵は教えの意。法華経方便品第二に「当に知るべし是の妙法は、諸仏の秘要なり」(同145ページ)と
あり、法師品第十に「薬王よ。此の経は是れ諸仏の秘要の蔵なり」(同362ページ)とある。

この句は五重玄義のうち**体玄義**、三大秘法では**本門の本尊**に配される。

如来(仏)のすべての甚だ深い事法。二この「事」とは仏因を修し仏界を証する実践法をいう。

この句は五重玄義のうち**宗玄義**、三大秘法では**本門の題目**に配される。

はつきりと宣へ示し、顕し説くこと。法華経如来神力品第二十一に説かれる

四句の要法(結要付嘱)の文の結語。この句は五重玄義のうち**教玄義**に配される。